

## 暮らしの中の木材

### 第5回 和風建築は木の文化

木材利用部 伊神裕司

我が国では、豊富な森林資源と地震が多く高温多湿な気候風土を背景に、揺れに強く調湿作用のある木の特性を生かして木造建築が発達してきました。そして、木の持つやわらかい風合いを上手に取り込んで自然との一体感を醸し出す和風建築には、日本人の美意識が凝縮されているともいわれています。しかし、近年生活様式の洋風化が進むにつれ、住宅における和室の割合が減少しています。鴨居、敷居、廻り縁などが和室のどの部分の名称かさえ分からない人も増えてきたのではないのでしょうか。

ところで、木を建築に用いる場合にはほとんどの場合なんらかの加工がなされます。木のどの部分からどのような部材を取るかを決定し、鋸等を用いて切り出すことを製材木取りといいます。和風建築に木を用いる上でも様々な工夫がなされてきました。日本のスギ、ヒノキなどの木には年輪がありますので、鋸の入れ方によっていろいろな木目が現れます。図1に示すA-A'の位置に鋸を入れればまっすぐな柃目の木目が現れますし、C-C'の位置では変化に富んだ板目の木目が現れます。あるいは、B-B'の位置では中柵と呼ばれる真ん中に板目が少し現れる天井板に珍重される木目が現れます。和室のデザインにおいては、これらの木目の組み合わせや、線(柱、鴨居、長押など)、

面(床、壁、ふすまなど)、点(部屋に対する障子、床の間に対する書画など)の組み合わせにより、木の素材感、美しさを生かしながらも一か所だけが目立つことのないような、調和の美が大切にされます(図2)。

一方、木を素材のまま見えるように使ってきた和風建築においては、使用する部位ごとに化粧性とともにも必要とされる性能があります。例えば、柱ならば見栄えがよいだけでなく屋根を支える耐力が必要なので、製材木取りにおいてはできるだけ節が表面に出ず、しかも木の中で強い部分を多く含み繊維が途中で切れないような配慮がなされます。また、図1に示すように木には木表と木裏があり、木は乾燥するに従って樹皮に近い木表側に反るので、年月が経つにつれて建て付けが悪くならないように、鴨居は木表を下向きに敷居は木表を上向きにして使います。床板は木表を上向きにして使いますが、これには木表の方が色合いが濃く光沢があり化粧性にすぐれていることの他に、木裏は木目が立ち、歩きにくくなるという理由があります。

和風建築における木の使い方には、ただ丸い木を四角くするというだけでなく、経験的に得られた先人達の知恵を見ることが出来ます。時代は変わっても、木の文化ともいわれる和風建築の良さはいつまでも受け継いでいきたいものです。

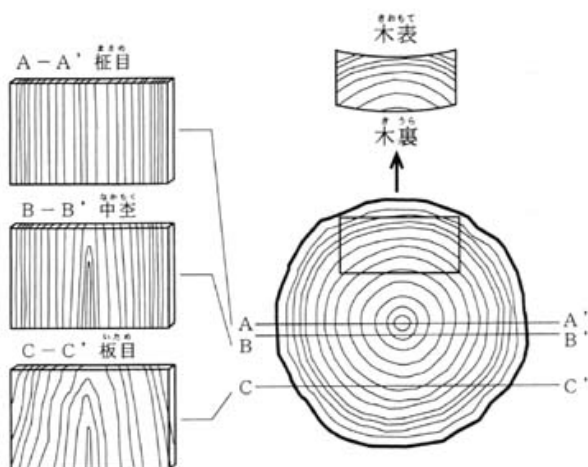


図1. 製材木取りと木目

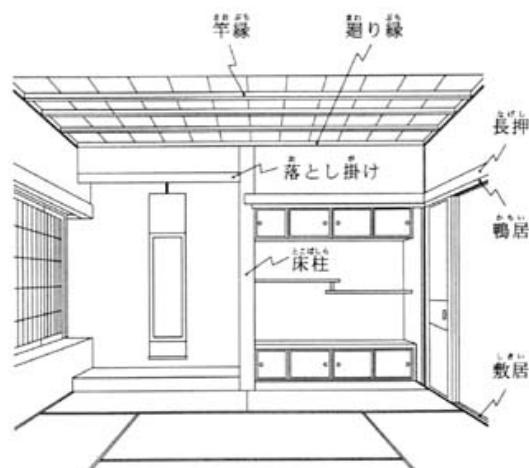


図2. 和風建築における和室の例